

「この人に聞く〜MURC ソーシャルビジネス支援プログラム〜」vol.4

多様な人との協働が研究員・コンサルタントの成長を促す 横山重宏さん（メタセコイア森の仲間たち＜猪鹿庁＞支援チーム）

経済・社会政策部の部長という立場でもありながら、メンバーの一員として支援チームに参画した横山主任研究員。今までこうした活動に積極的に参加した経験はなかったと話す横山主任研究員は、なぜプロボノ活動に参加するに至ったのでしょうか。その経緯と実際の支援に携わった感想を聞きました。

潜在的な問題意識との一致を感じて

ープロボノにエントリーしたきっかけを教えてください。

受託業務が忙しかったこともあり、仕事以外で社内の別の部署の研究員やコンサルタントと関わる機会はありませんでした。当社には研究員・コンサルタントが自主的に集まる勉強会などがありますが、そうした機会にもなかなか顔を出せなかったですね。

ボランティア活動にも今まで殆ど縁がありませんでした。東日本大震災の後、何かしたいという気持ちはあったものの、忙しさもあって具体的に被災地に行くなどのアクションは取れずにいました。

ただ、長く研究員として働�中で、社内にユニークな人材が集まっていることは感じていましたし、ここ最近ではマネジメント職に就いたことなどの事情もあり、特に他の部署で働く社員と繋がる機会を作りたいと、より強く思うようになっていました。

そんな中、同僚からこのプログラムの話を聞き、団体と知り合う機会という意味でも、社内のネットワークを広げるという意味でも、とても良い機会だと思い参加を決めました。潜在的にこうした機会を探していたのかもしれない。



ータイミングとしても、ご自身のニーズとしても、当プログラムがちょうど良い機会になったのですね。

自分の場合、受託調査の範疇で行う先進事例にアライクなどの機会を除けば、実際のソーシャルビジネス事業者の方と知り合う機会は殆どありません。ましてや自分の時間を使ってサポートする側に回る、となると、最初の一步をなかなか踏み出せません。今回のプログラムを通じて、団体に巡り合うきっかけをつかめたのはとても良かったですね。

手探りで始まった団体とのコミュニケーション

ー実際に支援に携わった感想を教えてください。

支援が始まった当初は、実際にどんな知見提供を行ったら良いか、手探りの状態でした。その後実際に活動の現場である岐阜県郡上八幡市を訪れ、代表者だけではなく他のグループのメンバーや地元の協力者と顔を合わせ話をする中でお互いの距離が縮まり、プロボノチームとして取り組むべき内容がクリアになっていきました。

支援終了後を見据えながら着地点を探す

ー最終報告会に向けて、現在はどうのようなアクションを取られているのでしょうか。

最終報告会まであと少しですが、現在はプロボノとしての支援が終わった後のことを意識しながらコミュニケーションを続けています。支援先の団体は、今までの活動の実績を踏まえて、これからの方向性を模索する段階にあります。ですので、今回の支援では、組織として取り組むべきことを再整理することに力点を置いてきました。

我々支援チームとしては、今後の組織内部での意思決定がより良いものになるよう、最後まで客観的な立場から現状分析のサポートが出来れば良いと思っています。

協働で得られた密度の濃いコミュニケーション

ーご自身にとって、また当社社員にとって今回の経験はどのような意味があったと思われますか。

共通の作業をするわけですから、別部署の同僚とも単に会議や勉強会で顔を合わせるより遥かに濃いコミュニケーションの機会を持つことができました。

自分自身は今、部長という立場にあります。しかし当社では個々の研究員やコンサルタントが専門性を持っていますから、キャリア形成という観点からマネジメント側が提供できるアドバイスは限られています。むしろ社員それぞれが社内外を問わず様々な立場の人たちと接する機会が用意されていることが、研究員・コンサルタントの成長を促すのではないかと思います。もちろん自分自身もそうした機会を持ちたいと思っていますし、その意味でもとても良い半年間だったと思います。

（2014年5月2日）



横山 重宏 経済・社会政策部 主任研究員・部長

1992年名古屋大学理学研究科修士課程（物理学専攻）修了。同年当社に入社。主に、労働経済、社会保障、産業分析等の調査に関わる。労働関係の調査分析の一環として、ニート・フリーターの就労支援、生活困窮者自立支援の案件を通じて自治体やNPO法人の活動にも触れる。その他、我が国の寄付やボランティアの規模推計・関数推計にかかわる経験も持つ。